

立荒村悵望將穿眼、追尋且送魂、意驚由過雁、腸斷豈開猿、有處堆沙插、何人折柳樊、自開還自落、誰見也、誰言、暮景愁難散、涼風恨易吞、寄詩花盛否、珍重可知恩、

〔春記〕長曆二年十月十六日己卯、今日於中宮可有進菊之興、從先日被企事、其事師房卿、公成卿、經輔

等發起云々、可入菊之器皆可用、金銀風流云々、十七日庚辰、左衛門佐經季自内退出來談云、昨夜

依召參中宮、關白、東宮大夫、中宮大夫、東宮權大夫、權中納言、信家四條中納言、依召參、但直衣云二位

中將、左兵衛督、新宰相中將、新宰相等也、皆著直衣祇候、不御傍親之公卿、直衣候、殿上人、經輔、資通、經

長、經季、師良、資綱、經成、經季等也、人々進一本菊等、其高或一丈餘云々、其入物各盡、金銀風流、此中公

成卿、經輔、菊、其入物太以美麗也、自餘人々不悅、覺者先有盃饌、東片庇事畢被參御前座、即有管絃事、

次和歌事云々、曉更被講和歌、畢各々分散者、人々云、檢非違使別當盡、金銀風流之事、先例無此事、可

彈指事也云々、資通、經長不進菊、凡不盡進云々、後聞菊二本被奉内御方、其一本被奉女院云々、

〔後二條關白記〕寛治七年十一月三日菊花植庭爲養眼所翫也、藥草也、本草可引見、

〔續世繼ふし柴〕鳥羽院くらの御ときに、大將殿源有仁源きくをほりにやりて、たてまつり給けるに、

うすやうにかきたるふみのむすびつけてみえければ、みかど御らんじつけて、かれはなにぞと

りてまいれと、くら人におほせられけるに、おほい殿はふと心えていろもかはりて、うつぶしめ

になりたまへりけるほどに、みかどひろげて御らんじければ、

こ、のへにうつろひぬとも菊の花もとのまがきを忘ざらなんとぞありける、きさい門院待賢

の御あねにおはすれば、ときくまいりかよひ給につけつ、しのびてきこえ給ことなども、お

はしけるなるべし、

〔本朝無題詩二植物〕賦菊花勅

藤原敦光

重九佳辰何物好、共携新菊思丁寧、爲隨時令初薰砌、漸吐日精半媚庭、玉蘂吹來唇自冷、金葩擲去手